



江戸時代・天保4~5年(1833~34) 横大判錦絵 四日市市立博物館蔵

CHRONICLE
OF MIE
VOL. 10

【美術編】

山口泰弘 やまぐちやすひろ
教育学部・美術教育講座教授
専門は江戸時代絵画史

江戸時代、大ベストセラーとなった歌川広重の「東海道五十三次」。その絵には街道沿いの四季が息づき、人々の旅情をかきたてた。三重の宿場も自然の表情とともに、叙情豊かに描かれている。

歌川広重 東海道 五十三次之内 四日市 三重川

江戸時代に入って間もなく、幕府は江戸日本橋を起点にして五つの幹線道路の整備を開始した。東海道・中山道・日光道中・奥州道中・甲州道中のいわゆる五街道である。なかでも東海道は、五街道のうち、江戸と京を結ぶ重要性から幕府が整備を最も急いだ街道で、寛永元年(1624)に早くも完成をみている。

浮世絵風景画には、街道を主題にしたものが多くあるが、なかでも東海道を主題にしたものが多。その嚆矢となったのが、歌川広重が、天保4~5年(1833~34)頃、版元保永堂から出版した「東海道五十三次」である。

東海道には五十三次つまり53の宿場があり、それに、出発点の江戸日本橋と終着点である京の三条大橋を合わせて55枚で一つのシリーズを構成するのが、東海道五十三次(東海道絵)の基本となっている。それだけに、一つのシリーズを完成させるだけでも大変な時間と労力と経費を要するが、保永堂版が大人気を呼び、増刷を重ねたほか、広重のもとには他の版元からも東海道絵の依頼が殺到する。内田実という広重研究者が広重の東海道絵を博搜したところ、何と40数種類に及ぶシリーズを残していることがわかった。もちろん、この数は広重の作のみであり、東海道絵人気を当て込んでほかの浮世絵師が描いた類似作を合わせたらその総数は途方もないものになるだろう。当時の民衆の東海道絵への熱狂ぶりを映し出している。

では、これほどまでに東海道絵を流行させたエネルギーはどこにあったのだろうか。

それは実は現代の私たちの関心事と似ていなくもない。たとえば旅行。すなわち遠い未知の土地への誘いは、マンネリ化した日常の退屈や忙しい仕事の憂さを断ちきって気分を新たに活力を生み出してくれるが、仕事や家庭に縛られ仕事に追われる私たちにとっては、思い立ったが吉日とばかりにおいそれと出かけられるものではない。先立つ予算の問題もあるだろう。そういった私たちの渴望をほんの少しでも満たしてくれるものといえば、その筆頭はテレビであろう。そ



それは紀行番組であったりクイズ番組であったりするが、居ながらにしてその地に遊ぶような楽しみを味わわせてくれる。現代では、インターネットがさらなる仮想現実の世界に我々を誘ってくれる。

浮世絵は、別名「江戸絵」とも呼ばれ、意外なことだが一種の江戸名物として人気を博していた。参勤交代で国許に帰る侍や商用で江戸に出た商人が帰りを待つ郷里の人々のために買い求め、江戸名所をみせて

はその活況を生き生きと話す、というようにちょうど現代の絵葉書と同じ役目を担っていたのである。お伊勢参りに代表される物見遊山の旅も江戸後期には非常に盛んになる。いわば旅行熱が東海道絵流行のエネルギー源になったといえる。

その嚆矢となったのが、すでに触れたように広重の最初の東海道絵であった。その叙情性に富んだ優れた画でたちまちのうちに江戸市民のあいだで大評判をとり、空前の大ベストセラーになった。現在では版元の名をとって「保永堂版東海道五十三次」と呼ばれている。広重の東海道五十三次といえば、一般的にはこの「保永堂版」を指すことが多い。

しかしこのシリーズは、53の宿場を描いたとは言いながら、宿場の賑わいを描写したものは意外に少ない。広重の描きたかったものが、四季のうつろいや雪月花あるいは雨や風がつくりだす街道沿いの自然の多彩な表情にあったからで、古来のたおやかな和歌の風情にも通じる叙情性が全編にあふれる由縁となっている。

雪といえば雪晴れの朝のまばゆいばかりの「亀山」、雨といえはにわか降り出した雨に人や駕籠が気忙しく駆ける「庄野」、そして風といえは「四日市」。「四日市」は三重川(正しくは三滝川)あたりの風景を描いたものだが、突風に吹き飛ばされた笠をあわてて追いかける旅人の滑稽ぶりが笑いを誘う。が一方で、強い風に煽られる柳と向かい風に合羽を掻き合わせて進む旅人、その向こうに広がる緑を失った葦原は、晩秋のうら寂しい叙情をあらわす。



【1】東海道五十三次之内 亀山 四日市市立博物館蔵
晩秋の「四日市」に対して、冬を描く。広重が東海道を旅したのは夏のことだったので、いずれも想像の産物ということになる。保永堂版では、全国を春夏秋冬の四季のいずれかに配分しているが、広重は、平安時代以来の和歌ややまと絵の伝統を深く意識している。

【2】東海道五十三次之内 庄野 四日市市立博物館蔵
「庄野」では、夏、にわかにかかった夕立を描く。激しい風雨にざわめく竹林は三層に分かれて描かれ、画面の奥行きを表す。西洋絵画の空気遠近法に近い。